

『和漢朗詠集』データベースシステム構築を目指して Toward completing a searchable data base of *Wakan Roei Shu*

山本 まり子

Mariko Yamamoto

日本大学 文理学部, 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

Nihon University, 3-25-40, Sakurajosui, Setagaya-ku, Tokyo

概要: 平安時代の書写とされる『和漢朗詠集』写本の数はいくつに上る。それらの資料を収集・集成し、その資料提供を行うことは古典の基礎研究に必須であるところ、『和漢朗詠集』についてはそれが十分になされているとは言い難い。その資料を研究上、活用し易い形にし、広く開示することが重要な課題として残されている。その実現のためには各伝本の関連性を見出し、系統立てを試みる必要がある。本報告ではそれに関する報告者の研究成果について概説し、現在、構築を目指しているデータベースシステムの内容を紹介し、制作の必要性にも触れる。

Abstract: There are more than thirty extent hand written copies of the Heian-period manuscript *Wakan Roei Shu*. Collection, compilation, and sharing of such manuscripts is essential for classical studies. However, this has not been sufficiently done for *Wakan Roei Shu*. Making the collection of the various manuscripts easily usable and widely accessible has been an important project that has till now been left undone.

In order to accomplish this, it is important to discover the relationship between each copy and to systemize the findings. In this report, I will outline the achievements the project to date and introduce the data base that is in progress, and explain the significance of the project.

キーワード: 和漢朗詠集, 藤原公任, 写本, 伝本

Keywords: *Wakan Roei Shu*, Fujiwarano Kinto, manuscripts, each copy

1. はじめに

『和漢朗詠集』は朗詠にふさわしい中国・日本の詩文、和歌等が載録されたアンソロジーである。撰者とされる藤原公任（966－1041）は学才豊かな文化人であり、この公任の撰による『和漢朗詠集』が当時を代表する作品の一つであることに疑いの余地はなく、これを研究することは我が国の文化を理解する上でも極めて重要である。しかしながらその原本は現存しない。その姿を窺い知るには現存する伝本（以下「写本」ともいう）に頼らざるを得ない。

伝本にはいわゆる完本（ほぼ全ての詩歌句が揃っている本）、零本（部分的に欠けている本）、切（断片）があり、それらを合わせると平安時代のもだけでも三十余種に上る。鎌倉時代に至っては、さらに多くの写本が作られている。

『和漢朗詠集』の伝本が活字化されている書籍のうち、代表的なものとして以下の二つを挙げることが出来る。一つは昭和14年（1939）刊行の

伊藤壽一・鹿嶋（堀部）正二両氏編『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』（注1）である。該書（以下、堀部校本と略称）は『和漢朗詠集』諸伝本の集成がなされた唯一の書籍である。もう一つは『新編国歌大観』（注2）である。今日の研究者が基礎資料として引用するこれら二つの書籍はそれぞれ課題を抱えている。例えば前者は山城切等の解題、釈文のために執筆されたものであることから、山城切を除く伝本の詩歌句の配列については示されていない。しかもそこには誤謬が存する。また後者にもその翻字内容について訂正されるべき箇所が存する。

より多くの資料を収集、集成し、その提供を行うことは古典の基礎研究に必須であるところ、『和漢朗詠集』については金字塔的作品でありながら研究の基盤を成す本文の整備が未だ十分に行われておらず、それは喫緊の課題である。

情報開示の際、研究上、活用し易い形にする必要がある。それに向けて報告者は平安時代の書写と

される『和漢朗詠集』諸伝本のうち、主要な伝本について研究を行い、2017年8月、その成果を公表した(注3)。本研究の一環として多数の伝本の収集、集成を行い、そこから諸伝本の実態について考察し、また各伝本の関連性を見出し、系統立てを試みた。その研究成果を基に広く情報開示を行うべく、そのデータベース(以下、DBと略称)化に取り組んでいる。

本報告ではまず『和漢朗詠集』諸伝本の概要、及び主要な伝本の関係性について述べる。その上で現在、構築を目指しているDBシステムの内容を紹介し、私見を述べる。

2. 『和漢朗詠集』伝本の概要と学術的価値

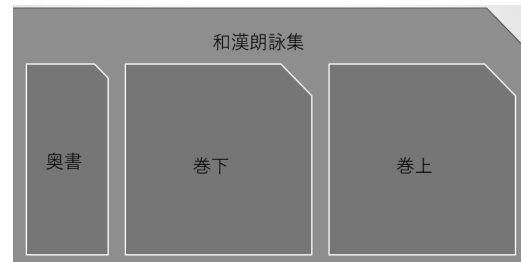
調査し得た『和漢朗詠集』諸伝本は本稿末尾の【表1】の通りである。そのうち、平安時代の代表的な伝本である雲紙本・関戸本は能書家である源兼行(生年未詳-1074以後)の作品である。書写年代は11世紀中葉(1050年頃)と推定されており、また、粘葉本・伊予切・近衛本・法輪寺切も、雲紙本・関戸本と同じ頃の書写と推定されている。いずれも当時を代表する能書家の手によるもので、名筆であるというのみならず、藤原公任の原本が書かれてからわずか数十年後の書写と推定されており、原本を探る上で貴重な資料である。

それらよりやや時代の下るものとしては唐紙切がある。唐紙切は、代々能書を輩出した、藤原行成(972-1027)を始祖とする書の家である世尊寺家第三代目伊房(1030-1096)の手によるという説があり、また、戊辰切巻上は世尊寺家第六代目伊行(生年未詳-1172以後)、戊辰切巻下は世尊寺家第五代目定信(1088-1154以後)の手によるという説があるが、定説には至っておらず、今後の課題として残されている。しかし、葺手本には奥書がある。それによると永暦元年(1160年)、世尊寺家第六代目伊行の真筆であることが知られる。『和漢朗詠集』の伝本の本数は古今集に次いで多いとされており、なおかつ平安時代の名筆が揃っている。文学のみならず、書(主に筆跡を指す)の学問領域においても『和漢朗詠集』諸伝本の学術的価値は非常に高い。

3. 『和漢朗詠集』の構成要素

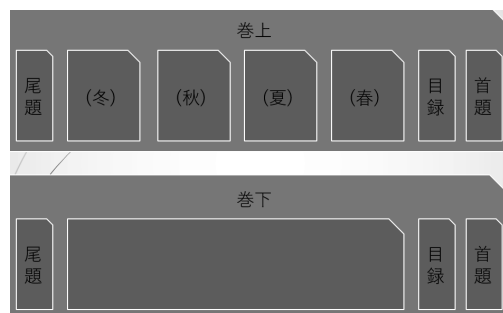
DBの構築に向けて、『和漢朗詠集』の構成について整理し、そこに名称を付した。以下、その点について述べる。【図1】の通り、『和漢朗詠集』は大きく三つのパートから構成されている。巻上と

巻下、そして奥書である(奥書については存しない伝本もある)。



【図1】『和漢朗詠集』全体構成

下掲【図2】のごとく巻上、巻下の中身については、完本等の場合、首題・尾題を有する伝本が多く、また首題の次に目録(目録については後述する)を有する伝本もある。目録の次には漢詩・和歌等が存するが、それらは巻上、下を通して百余りに部類分けされ、それぞれに立てられた題の下、配列されている。目録とはその題の一覧の仮称である。



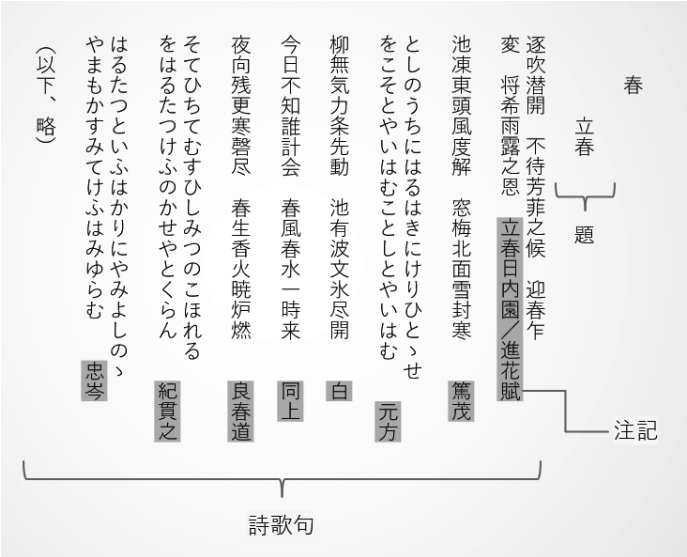
【図2】『和漢朗詠集』巻上・巻下の構成

従来、最善本とされている粘葉本の巻上の首題、目録の部分を翻字すると【図3】の通りである。

冬		秋		夏		春	倭漢朗詠集巻上 首題
雪	初冬	鹿	立秋	花	更衣	柳	
霰	冬夜	蘭	八月十五夜	橘	蓮	暮春	春興
仏名	歳暮	露	早秋	蓮	郭公	花付	早春
	炉火	霧	七夕	螢	螢	花	春興
	霜	掃衣	九月	端午	端午	花	春夜
	氷付	紅葉	秋興	納涼	納涼	花	子日
	香水	雁	秋晚	晚夏	晚夏	花	三月
		雁	秋夜			花	二月
		雁	女郎花			花	三月
		萩	萩			花	三月

【図3】首題・目録の例(粘葉本 巻上)

また、目録の次に存する「春」冒頭の「立春」の部を挙げると【図4】の通りである。題「立春」の下、漢詩・和歌等（詩歌句と仮称する）が配列されている。その末尾には小書きで作者名・題詞等が注されている。それらを纏めて注記と呼称する。以上の定義付けはDBシステムの構築上、有効である。



【図4】題・詩歌句・注記の例(粘葉本 巻上)

4. 『和漢朗詠集』諸伝本の関係

この分野の著名な先学には堀部正二氏、久曾神昇氏が挙げられる。堀部氏は主に本文の関係に注目し、久曾神氏は主に形態面に注目し、それぞれ主要な伝本を分類した。それらを纏めると下掲【図5】の通りである。

	堀部正二	久曾神昇
粘葉本	御物伝行成筆粘葉装本の系統に近きもの	乙類
伊予切		
近衛本		
法輪寺切		
雲紙本	関戸家蔵伝行成筆本（源兼行筆）の系統に近きもの	甲類
関戸本		
卷子本		
葦手本		
	いづれとも判定つかず夫々に特異の本文を有して雑類とも称すべきもの	

【図5】先学による『和漢朗詠集』諸伝本の分類

堀部・久曾神両氏の分類はほぼ一致しているが、そこでの所論に扱われなかったいくつかの伝本が存することから報告者はそれらを加え、平安時代の書写とされる諸伝本に関する先学の研究について形態・本文、及び書(筆跡)の面から改めて検討を行った。「形態」とは主に詩歌句の有無、及びその配列を指す。本研究では、原則、漢詩は一文字、和歌は一句を単位とし、異同調査を行った。

ここでの「本文」とはその個々の本文を指す。例えば堀部・久曾神両氏の分類中の粘葉本・伊予切と雲紙本・関戸本との間には少なからず異同がある。その事例を挙げると次の【図6】の通りである。

下記の事例から①「巻」(粘葉本・伊予切)と「撥」(雲紙本・関戸本)、②「くもはれて」(粘葉本・伊予切)と「きりはれて」(雲紙本・関戸本)の異同が確認される。

新編国歌大観番号：554

遺愛寺鐘敲枕聴 香鑪峰雪^①巻簾看
(撥)

新編国歌大観番号：202

あまのかはあふきのかせに^②くもはれて
(きりはれて)
そらすみわたるかさゝきのはし …②

【図6】粘葉本・伊予切と雲紙本・関戸本との異同の例

書写年代を平安時代に限定し、諸伝本の関係について考察すべくそのような異同調査を全本文に亘って行った。本稿末尾【表7】にその結果を挙げた。それによると、堀部・久曾神両氏が同類とされた粘葉本と伊予切とは漢詩(対角線の右側)96.1%、和歌(対角線の左側)94.0%ほどが一致しており、また、雲紙本と関戸本とは漢詩(対角線の右側)92.9%、和歌(対角線の左側)93.3%ほどが一致している。

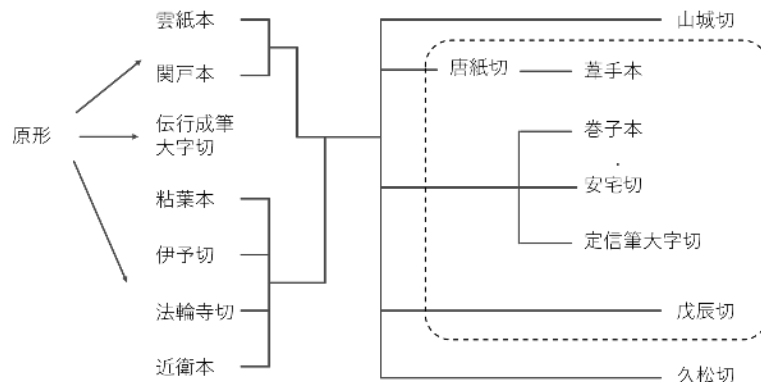
そのような個々の本文に加え、題の記載内容、詩歌句の有無、配列等も考慮し、諸伝本の関係について検討を行った。その結果、確かにこれらの両本は近い関係にあることが判り、それぞれ同類であると見做し得る。以下、粘葉本類、雲紙本類と呼称するが、その両類間には本文異同が少なからずある。推定されている書写年代が撰者である公任の没後まもなくの頃であるということから、その本文異同に公任が関わった可能性は十分考えられる。た

だし、久曾神氏が述べられたように雲紙本類を「初稿本」、粘葉本類を「精撰本」と捉え、雲紙本類に「追補」されたのが粘葉本類であるという所説に対しては首肯し難い。むしろ、題、詩歌句の選定という採録の基本となる部分においてまず、公任は雲紙本類と粘葉本類の共通的基盤となる部分を作ったと考える方が矛盾は少ない。

公任が撰した原本が一本であったとは限らない。公任の下書きレベルのもの(「原形」と仮称する)から詩歌句の削除がなされ、本文・注記等に検討が加えられたものが雲紙本類の親本であると推測される。その推測が正しければ、粘葉本類の親本の生成過程においてはその「原形」に詩歌句が増補された可能性はあり得るが、そこから削除された可能性は低いと報告者は考えている(注4)。また、そこから本文の改変がなされたという可能性もあり得る(注5)。

次の【図8】は諸伝本の間をダイアグラムで示したものである。その左側に示したのは、以上述べた11世紀中葉の書写と推定されている伝本である。

【図8】の右側に示した12世紀の書写とされる諸伝本については以下、概説する通りである。



【図8】平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本の系統図

12世紀書写本群は、大まかには「形態的な面においては雲紙本類の流れを汲む」と言えるが、粘葉本類の要素も混在している。具体的には久松切・戊辰切がどちらかといえば粘葉本類よりであるのに対して、巻子本・安宅切・定信筆大字切・草手本・山城切等は雲紙本類の系譜上に位置すると考えられる。巻子本と安宅切とは近い関係にあり、かつ、その二つの伝本は草手本とも近く、また、戊辰切とも連関する。一方、戊辰切は後代的変移の様相を帯びており、それに類する伝本には久松切・山城切が挙げられる。なお、【図8】における右側の点線で囲んだ伝本は前述した代々能書家を輩出した藤原行成を始祖とする書の家である世尊寺家、もしくはその周辺の人物の手によると推定されているものである。

5. DBシステムの構築

報告者は以上の研究成果に基き、伝本間の異同を表現し、なおかつ検索機能を兼ね備えたDBシステムの構築を目指している。

本稿末尾の【図9】はその検索画面（試案）である。前述した『和漢朗詠集』の構成要素をチェックボックス形式で示した。そこにチェックを入れると検索範囲が当該部分に限定され、チェックを全て外すと全範囲に亘る検索がかけられる。

その次に掲載した【図10】は『和漢朗詠集』所収の冒頭作品の情報の出力画面（試案）である。詩歌

句に加え、注記のことも考慮に入れ、一文字でも異なれば別物として扱う。そこでは三つのバリエーションがあることを示している。その右上に載せたのは伝本の一覧である。その配置は前述した諸伝本の関係を基に定めた。左側の「粘葉」、つまり粘葉本に記されている詩歌句・注記を一段目に配置する。そして各バリエーションを載録している伝本に数字でフラグを立てる。そこから、一段目のものが粘葉本を含む五つの伝本に記載されている（つまり、諸伝本のうちもっともメジャーなバリエーションである）ことが判る。

フラグで使う数字、この場合の「1」は、各伝本において、当該作品が一番目に記載されていることを示すものである。ここでは冒頭の作品を例に挙げたため、すべてが「1」であるが、伝本によっては詩歌句の欠落があったり、配列上、入れ替わりがあったりすることがあり、その場合は同じ詩歌句であっても異なる数字のフラグが立つことになる。この表の下から二段目の「ナシ」とは、当該詩歌句が無い（つまり書写されなかったものである）ことを意味する。その下の「未調査」とは報告者が未調査であることを意味する。零本や切の場合、この「未調査」の欄に○印が付されることになる。

6. DB構築の必要性と今後の課題

報告者が目指すDBシステムでは本稿の冒頭で述べた堀部校本において不足していた情報をカバー

し得る。また、詩歌句のみならず、首題、尾題、目録、題、奥書等、伝本が持つほぼ全ての情報をこのDBに収め得る。DBへの入力完了すれば、外字等の問題は当然あり得るものの、すべての伝本を対象とした全文検索が可能となる。

ところで『新編国歌大観』CD-ROM版には『和漢朗詠集』の検索システム機能が付与されている。語彙・句・歌集歌番号を検索するためのものである。しかし、そこに採用されている伝本は粘葉本のみである。また、そこでは校訂が施されており、さらにその基準が定かではない。よって、粘葉本の真の姿を窺い知ることできない。報告者の目指すシステムとは明らかに制作意図が異なる。なお、『和漢朗詠集』所収の作品は他の文献と重なるものが多い。その出典たるものには散逸した作品もあり、注記がその出典に関する情報を有する場合もある。そのように『和漢朗詠集』諸伝本の注記には詳細であり、内容的にも資料的価値を有するものがあるが、粘葉本の注記は他の伝本に比して詳細とは言えない。以上のことから、新たなDBシステムの構築の必要性を感じる。

『和漢朗詠集』が他の作品に多大な影響を与えたという事実は周知の通りである。将来的にはDBシステムの中、『和漢朗詠集』に関する他の文献の情報の追加、更新について検討したい。その情報が加えられることによって他作品の研究への更なる寄与が期待される。

〔注〕

- (1) 『伝藤原定頼筆和漢朗詠集山城切解説及釈文』[1939年 里見忠三郎]
- (2) 『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver. 2』[2003年 角川書店]
- (3) 拙著『平安時代書写 和漢朗詠集 諸伝本の研究』[2017年 お茶の水女子大学 E-book サービス]
- (4) 粘葉本類の生成過程において、仮にそこから削除されたのであれば雲紙本類においてもそれと同一の詩歌句等が削除されたと考えられる。
- (5) 前掲著(3)に同。第二章第六節を参照されたい。

本研究成果の一部は JSPS 学術研究助成基金助成金 JP15K02214 の援助を受けたものである（『和漢朗詠集』諸本の集成と研究・基盤研究<C>）。

【表1】平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本一覧

伝本名	筆	略称(1)	略称(2)	出典
大字和漢朗詠集切	伝藤原行成	伝行成筆大字切	行大	『古筆学大成』(平2 講談社)
雲紙本和漢朗詠集		雲紙本	雲紙	
関戸本和漢朗詠集切		関戸本	関戸	複製本(大8 榮礪堂)
雲紙本和漢朗詠集切			雲切	『古筆学大成』(平2 講談社)
粘葉本和漢朗詠集		粘葉本	粘葉	複製本(明41 審美書院)
近衛本和漢朗詠集		近衛本	近衛	『古筆学大成』(平2 講談社)
法輪寺切本和漢朗詠集		法輪寺切	法輪	
伊予切本和漢朗詠集		伊予切	伊予	『日本名跡叢刊』(昭56 二玄社)
久松切本和漢朗詠集(巻上・下)		久松切	久松	複製本(昭35 便利堂)
久松切本和漢朗詠集(巻下)				原本(出光美術館蔵)
安宅切本和漢朗詠集	伝藤原公任	安宅切	安宅	『古筆学大成』(平2 講談社)
唐紙本和漢朗詠集切		唐紙切	唐2	
卷子本和漢朗詠集		卷子本	卷子	複製本(昭7 尚古会)
太田切本和漢朗詠集			太田	『古筆学大成』(平2 講談社)
益田本和漢朗詠集切			益田	
大内切本和漢朗詠集			大内	
下絵和漢朗詠集切			下絵	
散書和漢朗詠集切				
和漢朗詠集切(一)				
山城切本和漢朗詠集	伝藤原定頼	山城切	山城	複製本(昭14 里見忠三郎)
大字和漢朗詠集切(二)	伝源俊頼			
多賀切本和漢朗詠集	藤原基俊		多賀	『古筆学大成』(平2 講談社)
大字和漢朗詠集切	藤原定信	定信筆大字切	定大	
戊辰切本和漢朗詠集(巻下)		戊辰切	戊辰	複製本(昭3 尚古会)
戊辰切本和漢朗詠集(巻上)	藤原伊行			
葺手下絵和漢朗詠集		葺手本	葺手	『古筆学大成』(平2 講談社)

【表 7】平安時代書写『和漢朗詠集』諸伝本の本文異同調査表

草手本	戊辰切	山城切	卷子本	久松切	伊予切	法輪寺切	近衛本	粘葉本	関戸本	雲紙本	歌 詩
283	279	278	282	277	283	36	103	281	284		雲紙本
201	184	192	212	208	191	26	67	184	265		
71.0	65.9	69.1	75.2	75.1	67.5	72.2	65.0	65.5	93.3		%
283	279	278	282	277	283	36	103	281		759	関戸本
202	182	197	211	205	189	28	65	182		705	
71.4	65.2	71.0	74.8	74.0	66.8	77.8	63.1	64.8		92.9	%
280	276	277	279	276	283	34	103		827	763	粘葉本
184	179	148	183	220	266	33	94		585	559	
65.7	64.9	53.4	65.6	79.7	94.0	97.1	91.3		70.7	73.3	%
102	103	101	103	105	105	32		459	450	414	近衛本
69	72	60	60	86	94	31		432	315	313	
67.6	69.9	59.4	58.3	81.9	89.5	96.9		94.1	70.0	75.6	%
36	36	35	36	36	36		131	152	149	146	法輪寺切
27	24	21	24	29	33		121	146	109	112	
75.0	66.7	60.0	66.7	80.6	91.7		92.4	96.1	73.2	76.7	%
282	278	279	281	278		152	459	842	827	763	伊予切
192	183	155	194	227		149	428	809	583	559	
68.1	65.8	55.6	69.0	81.7		98.0	93.2	96.1	70.5	73.3	%
276	272	273	275		835	151	459	835	822	754	久松切
208	193	175	201		686	125	379	699	585	556	
75.4	71.0	64.1	73.1		82.2	82.8	82.6	83.7	71.2	73.7	%
281	277	276		825	830	147	452	830	817	751	卷子本
200	187	170		526	530	86	285	532	455	430	
71.2	67.5	61.6		63.8	63.9	58.5	63.1	64.1	55.7	57.3	%
277	273		809	814	819	151	444	819	806	738	山城切
168	156		508	657	653	121	344	656	603	565	
60.6	57.1		62.8	80.7	79.7	80.1	77.5	80.1	74.8	76.6	%
278		813	824	829	834	149	458	834	823	755	戊辰切
205		669	561	696	714	122	388	716	609	583	
73.7		82.3	68.1	84.0	85.6	81.9	84.7	85.9	74.0	77.2	%
	813	796	807	812	817	145	439	817	807	740	草手本
	682	598	515	625	631	121	350	633	561	534	
	83.9	75.1	63.8	77.0	77.2	83.4	79.7	77.5	69.5	72.2	%

本調査にあたり、異体字・略字等、和歌の中の漢字と仮名との違い、仮名遣いの違い等について、異同とは見做さないこととした。また、後人

による改竄かと思しき文字、剥落等のため判読不可能な文字、同筆と認められない文字等については原則、調査の対象外とした。

検索入力項目

	検索する語句を入力してください。新編国歌大観番号で検索する場合は、以下のチェックボックスの「新編国歌大観番号」にチェックをし、半角数字を入力してください。
--	---

☐ 全検索項目セット・リセット	全ての項目から検索します。もしくは、検索項目をリセットします。
☐ 新編国歌大観番号	新編国歌大観番号から検索します。
☐ 新編国歌大観に無いもの	新編国歌大観未所収のものから検索します。
☐ 首題（内題）	首題（内題）から検索します。
☐ 目録	目録の中の語句について検索します。
☐ 題（本文中）	題（本文中）から検索します。
☐ 詩歌句	詩歌句から検索します。
☐ 詩歌句（初句・二句）	詩歌句（初句・二句）から検索します。
☐ 注記（全て）	注記（全て）の中から検索します。
☐ 注記（作者名のみ）	注記（作者名のみ）の中から検索します。
☐ 注記（作者名を除く）	注記（作者名を除く）の中から検索します。
☐ 巻上	巻上の中から検索します。
☐ 巻下	巻下の中から検索します。
☐ 尾題	尾題から検索します。
☐ 奥書	奥書から検索します。
検索	このボタンをクリックすると検索します。

【図 9】平安時代書『和漢朗詠集』諸伝本中の語句検索画面

巻上（春）	立春	〈1〉	粘葉	伊予	近衛	法輪	太田	戊辰	久松	行大	定大	安宅	巻子	唐2	葦手	山城	関戸	雲紙	大内	益田	下絵	多賀	雲切
逐吹潜開	不待芳菲之候	迎春乍変	将希雨露之恩	1	1				1				1		1								
			立春日内園ノ進花賦														1	1	1				
逐吹潜開	不待芳菲之候	迎春乍変	将希雨露之恩					1															
		ナシ																					
		未調査			○	○	○			○	○	○		○					○	○	○	○	○

【図 10】平安時代書『和漢朗詠集』諸伝本中の語句検索結果の例